
D u n g e o n s & a m p ; T a k a f u m i s

D a i s y K a t s u r a

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

Dungeons & Takafumis

【コード】

N4924D

【作者名】

Daisy Katsura

【あらすじ】

PS2版・智代アフターに入っているD&Tの小説を書いてみました。

(前書き)

これ、参上！
言っておくが、これは最初から最後までクライマックスだぜ！

古くより、魔術師たちは城に籠ってよりよい鷹文を産み出そうと研究を重ねていた。

だが、幾年にも及ぶ研究は未だ実りを知らずに混迷。魔術師たちの焦燥の日々だけが過ぎ去って行った……。

しかし、ある偶然をきっかけにして研究は突如成功を収める事となる。その礎となったのが、悪魔との契約により偶発的に生み出された054番。彼にして漸く鷹文は感情を得たのである。

その彼を培養の触媒として今日の鷹文たちの繁栄はある。彼なくして鷹文たちの歴史は無い。

10日前の嵐の晩、054番が突如行方をくらました。

魔術師たちは懸命な捜索を行い、鷹文たちも一丸となって彼らの親を捜した。

結果、何人も鷹文たちが犠牲になるものの、漸くその居場所を突き止める事に成功した。

研究施設である城の地下に広がる獣人の巣くう迷宮。その最深部に彼の姿は在った。

だが、そこで待ち受ける獣人たちは好戦的で且つ獰猛。魔術師たちではとても手に負えない相手である。

そこで鷹文たちは、大陸全土におふれを出して戦いの猛者たちを募った。

広大な地下迷宮で、剣士の朋也、盗賊の智代、アサシンの河南子、魔法使いのともが獣人共と交戦をしていた。

「くっ、こいつらキリが無えぞ！」

そう言ったのは、剣を振るって獣人を一匹切り裂いた朋也だった。
「確かにキリが無いな」

同意するのは智代だ。

「なあ、ともさん。何かいっぺんに片付ける魔法とか無いの？」

奥からどんどん出て来る獣人に、完全に諦めきって休んでいる河
南子が訊ねる。

「そんな物が有ったらとつくとつくと使つとるわ。と言つか、お前。休ん
どる暇が有ったら戦え」

「その通りだけ、お姫様。鷹文に逢いたく無いのか？」

「えー、だって倒すの面倒なんだもん」

その言葉に智代が含み笑いをする。

「どうした、智代？」

「ああ。このまま進まなければ鷹文は確実に死ぬだろうと思っとな」

智代はおふれを受ける少し前に夢を見ていた。それは、地上が1
00人の鷹文で埋め尽くされると言う大変おぞましい悪夢だった。

彼女はそれが近い将来、現実に取りこり得る事と考えて、今、此処
に居るのである。

「鷹文を凄え恨んでるのな、お前」

「当然だ。あんな奴に地上を埋め尽くされてでもみる。考えただけ

でも虫唾が走る」

「智代、後ろだ！」

朋也の叫び声に智代は後ろを振り向く。

二体の獣人が直ぐそこまで迫ってきている。

智代は構える間も無く襲われる。が、間一髪の所で朋也が迫り来
る二体の獣人を倒した。

「助かった、朋也」

「良いつて事よ。それより、どんどん倒して先へ行こうぜ」

「ああ、そうだな」

「雑魚に構わず進むぞ」

ともがそう言い、四人は雑魚共を無視して先へ進んだ。

「ウォー！」

突如、でかい怪物が四人の前に立ちはだかる。

「む、ゴーレムじゃ」

「ゴーレム!？」

ゴーレムが四人まとめて薙ぎ払う。

四人はそれぞれ吹っ飛んで壁に叩き付けられた。

「何なんだこいつは!? 獣人まじきのとは桁違いだぞ！」

智代が立ち上がり、そう言いつて口に付いた血を手の甲で拭う。

「どうやら、此奴を倒さなきゃ先に進めないって訳か」

言つて朋也はゴーレムに駆けた。が、ゴーレムに拳によって弾き飛ばされる。

「朋也！」

智代が地面に落ちた朋也の下に駆ける。

「闇雲に戦つてもやられるだけじゃぞ」

「ウォー！」

ゴーレムが雄叫びを上げ、智代に攻撃をした。

「ふっ」

智代は朋也を抱えて飛び退く。

「とも、何か作戦は無いのか？」

智代の問いにともは考えた。

「そうじゃのお・・・。誰かが囷になつて他の奴らで後ろから攻撃すると言つのはどうかの？」

「囷か。それなら俺に任せとけ」

「朋也、お前は駄目だ。もしお前が殺られたら、私は・・・」

「否、やるのは俺じゃない。よく見ておけ」

三人が朋也を見詰める。

「出でよ、変なのー！」

朋也が叫んだ刹那、彼の前に風子が召喚された。

「風子、参上です・・・って、此处何処ですか!？」

「城の地下迷宮」

「所謂、ダンジョンと言う奴ですか？」

「ああ。それより、風子」

「何ですか、変な人？」

「変な人言っない！まあ良いや。風子、お前に頼みがあるんだ。囧をやっつけてくれないか？」

「囧・・・ですか。え、風子囧ですか!？」

頷く朋也。

「蠅取り紙ですか!？」

再度頷く。

「利用するだけ利用して最後はポイ捨てですか!？」

「ああ。だから堂々として行ってこい」

「解りました。風子、行ってきます」

言って風子はゴーレムの下へ歩いて行った。

「さあ、鬼さんこつちです」

囧として召喚された風子がゴーレムを誘う。

「ついでに喰らうです!えいっ」

風子は懐からヒトデの彫刻を取り出して投げ飛ばした。

コロソ

ヒトデは大して飛ばず、風子の足下に落ちた。

「もう一度です!えいっ」

拾ってもう一度ヒトデを投げる風子。

「朋也、あれは何をしているんだ？」

疑問に思った智代が朋也に訊ねる。

「攻撃しようとしているんだらう」

「全然役に立っていないでは無いか!」

「けど、今のあいつは隙だらけだ」

「うむ、皆の者、行くぞ」

四人は一気に攻めた。

「はっ」

ゴーレムを斬り付ける朋也。

「ふっ」

ゴーレムを渾身の力で蹴る智代。

「えいつ」

ゴーレムを短剣で斬り付ける河南子。

「それっ」

ゴーレムに魔法攻撃をすとも。

ゴーレムはその場に倒れて消滅した。

風子は未だに、投げては拾う、の繰り返し行為をしていた。

「よくやった風子、もう良いぞ」

朋也がそう言うと、風子は投げ拾い遊びを止めた。

「もう終わったんですか？」

「ああ。ゴーレムは倒れた。お前が倒したんだ。このヒトデで」

朋也が風子のヒトデを示す。

「風子凄いです！化け物を倒しました！」

「ああ、凄いな風子は」

「それじゃあ風子、もう帰ります」

言って風子はその場から消え去った。

「よし、参るぞ」

一行は更に奥まで進んで行った。

「おい、誰か倒れているぞ！」

朋也は目の前で倒れている何者かの下に駆けた。

「鷹文！」

河南子が朋也に続く。

「おい、大丈夫か！？」

朋也が鷹文の頬を軽く叩く。

「う・・・うん・・・」

鷹文が薄目を開けた。

「鷹文！」

「ああ、お姫様ではありませんか。それと、僕は054番。オリジナルではありません」

「死ねえ！」

054番を前に発狂した智代が彼に襲い掛かった。

「止める！」

キンッ！

朋也の剣が智代のそれを止める。

「落ち着け智代！」

「朋也、私の邪魔をするな！もし邪魔をすると言つのなら、お前を斬る！」

「バカ、今はそんな時じゃねえだろ。人類の存亡が掛かってんだ。

剣を仕舞え、智代」

「・・・取り乱してすまなかった」

落ち着きを取り戻した智代は剣を収めた。

「で、何があつた？」

「聞いて下さい・・・。この先で獣人たちが、過去に・・・飛ばうとして・・・いる。歴史を・・・塗り変える為に」

「何！？もしかしてそれは、超ド級高位魔法デロリアンではないか？」

「で、その超ド級高位魔法とやらで過去へ飛んで歴史が変わるとどうなるんだ？」 「人間が滅びます」

054番は即答した。

「此処から先は、僕も一緒に行きます。僕にはゴーレムの力を無効化する能力がありますから」

「グズグズしてはおれん。皆の者、先を急ぐぞ」

054番が加わり、5人になった一行は奥に進んだ。

すると奥から、これ以上行かせまいと、獣人共が一体のゴーレムと一緒に湧き出てきた。

「またかよ！」

朋也は剣を抜き、雑魚に襲い掛かった。

「雑魚に構うな。ゴーレムを倒せ」

ともはそう言うが、ゴーレムの回りに雑魚兵が並んでいて近付く

事が出来ない。

「そうは言っても、この数ではどうしようも無いぞ」

智代がそう言いながら一体倒した。

「仕方がない。朋也、下がっている」

「ああ？何だよ」

「良いから下がっている。一か八かあれをやってみる」

「あれって何だよ？」

「良いから下がっている。二度も言わすな」

「あ、ああ」

朋也は後退した。

「お前たち、運が良かったな」

言って智代はグラビティジャンプを発動した。

「やあーっ！」

空中へ高く飛び上がり、地面を叩き付ける。

地面が激しく揺れ、雑魚共を滅却。

054番は能力を発動。ゴーレムが消滅する。

「うむ、急ぐのじゃ」

一行は先を急いだ。

「うわああああ！」

突然、054番が悲鳴を上げた。

振り返ると彼が倒れていた。

その隣には雑魚が一体。

「全部倒したんじゃないかねえのかよ!？」

朋也が駆けて斬り付ける。

「鷹文！」

河南子が054番の下に駆けた。

「丁度良い。このままのたれ死んでしまえ」

「お前な・・・」

朋也は呆れた様に智代を見た。

「皆さん、僕の事は放っておいて行って下さい」

「出来ない。あんたを見殺しにするなんて出来ないよ！」

「姫、気持は解るが、状況的に054番の同行は無理じゃ」

「姫、奥にオリジナルが居ます。早く行ってあげて下さい」

河南子は徐に立ち上がる。

「解った・・・」

「うむ、では参るぞ」

4人は054番を残して奥へ進んだ。

「おー、一杯居るー」

物陰に隠れて覗いている朋也が言った。

「あそこに居る殆んどがゴーレムじゃ。これでは迂濶に近付けんの
う」

「見てあれ、鷹文よ！」

河南子が人質に捕われているオリジナルを指差した。

「しかし、このままでは近付け」

その時、群がる獣人の半数が消えた。

「消えた・・・よな？」

朋也がとも話しを振る。

「恐らく、デロリアンを使ったのじゃろう。見ろ、我々の姿が消え
掛かっているでは無いか」

「拙いなそれは。一気に攻めて後を追うか」

「追うってどうやって？」

「簡単じゃ。デロリアンを使うのじゃ」

「だったら、とつととやつつけて後を追おうぜ！」

朋也の言葉に三人は頷き、敵陣へと乗り込んだ。

「うりゃ！」

「はあー！」

「えいっ！」

「ほれ！」

四人は次々に獣人共を倒して行き、ついに残るは一体となった。
「親玉って奴か」

朋也が言い、四人が身構える。

親玉は朋也に襲い掛かった。

「うわっ！」

朋也は吹っ飛ばされ、壁にぶつかって落ちた。

「智代、俺、もう駄目かも」

その言葉に智代が近付き「弱音を吐くな」と言う。

「仕方ない。これを見せてやるから立て」

言って智代はパンチラを発動した。

「何か力が湧いてきたぜ！」

朋也は立ち上がり様にそう言った。

「あいつは俺が倒す！」

朋也は親玉に接近して斬り付けた。

ひらりと身をかわす親玉。

「クソッ、避けんじゃねえ！」

朋也は思いつ切り蹴り飛ばした。

親玉が智代の方へ飛んで行く。

「ん!？」

智代の渾身の蹴り。

コンボが繋がった!

「朋也、刺し殺せ！」

智代は親玉を回し蹴りで朋也に吹っ飛ばした。

グサッ!

朋也の突き立てた剣が親玉の体を貫いた。

親玉は暫くもがいてピクリとも動かなくなった。

朋也は親玉から剣を抜いて鞘に収めた。

「鷹文！」

河南子がオリジナルに駆ける。

「ああ、河南子」

「鷹文！」

河南子は鷹文に抱きついた。

「姫、再会を喜ぶには未だ早いぞ」

「そうだったね」

河南子は鷹文を解放して皆の方を向く。

「皆も知っているとと思うが、もうかなりの獣人たちが過去に向かっている。早く後を追おう。それと河南子、君は此処に残ってくれ」

「え、どうして？」

「それは、君が我が国の姫君だからだ」

「鷹文は、鷹文はどうするの!？」

「僕は、皆と一緒に過去へ飛ぶ。とも、頼む」

「うむ、時間が無い。参るぞ」

ともは魔力を集中させた。

「超ド級高位魔法デロリアン!」

その瞬間、4人は河南子を残して過去へ飛んだ。

残された河南子は、その場に崩れ、泣き叫んだ。

「鷹文ー!」

こうして、過去に飛んだ獣人たちは、後を追った4人の手によって討滅され、人類滅亡の危機は免れた。

払った犠牲も多かった。

剣士の朋也、盗賊の智代が前衛に出て指揮を取り、敵を討滅。その際、二人は敵と相撃ちになり死亡。

魔法使いのともも、魔法で鷹文を量産して戦った。

結果、多くの鷹文たちが失われる事になった、と城の書物には記されていた。

一方、現代に残された河南子は、鷹文が見つかった、と言う情報を手に入れる度に、各地を歩き回ったと言う。しかし、今までに見つかった鷹文たちは、全て亡骸だった。

河南子が半ば諦め掛けた頃、遠く離れた地で鷹文が見つかったと言う情報が入った。

勿論、河南子はそこへ向かった。そして、漸く、河南子は生きた鷹文と再会する事が出来たのだ。
「おかえり、鷹文」

完

(後書き)

ふと思ったんだが、デロリアンの由来ってあのデロリアンか？

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4924d/>

Dungeons & Takafumis

2009年3月24日10時32分発行